

【第2分科会】子供の発達に関する課題

<p>提言1 研究主題</p>	<p>地域の教育力を生かした豊かな心の育成 ～家庭や地域との継続的な連携・協働を通して～</p>
<p>提言者</p>	<p>大町町立小中一貫校大町ひじり学園前期課程 教頭 千綿 和也</p>
<p>協議の柱</p>	<p>変わりゆく時代の中で持続可能な地域連携活動を推進するために、副校長・教頭としてどのように取り組んでいけばよいか</p>
<p>協議内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間行事・活動計画表は、今年度表にして分かりやすく可視化され、下に連絡先が記入されているので、活用しやすくなっている。</li> <li>・人材発掘や人材の高齢化が課題である。</li> <li>・地域貢献で大切なのは主体性である。自発的に主体的に貢献参画意識をもって行っていくために、職員が生徒に「何のためにやっているのか」「どうしたいか」と問いかける場面が多かった。以前は内向的で指示待ちが多かったため、生徒への問いかけを変えながら自分たちで考えるように仕向けていったことで生徒たちが変化していった。</li> <li>・これから3年間、小中学校で連携しながらさらに研究を深めていくこととしている。</li> <li>・地域連携活動で一番大切にしないといけないことは、学校と地域が双方向に感謝できたり、貢献できたりする学習効果の高い活動ができるようマネジメントすることである。それが持続可能な地域貢献活動につながっていくのではないかと考えている。</li> </ul>
<p>提言2 研究主題</p>	<p>自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の育成 ～支援体制を充実するための副校長・教頭の役割～</p>
<p>提言者</p>	<p>武雄市立武雄中学校 教頭 横尾 文雄</p>
<p>協議の柱</p>	<p>主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の発達のために、小中学校で共有していくことと、その体制づくりのため副校長・教頭はどのようにかかわればよいか</p>
<p>協議内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・提案の考察については主題設定の理由にあるように、生徒指導提要の令和の日本型教育を受けて研究部会で話し合った。市内の小中学校の実態をアンケートで集約し、キーワードをもとにAIに考えさせて作らせ、研究部で手直したものをあげている。各学校で有効なものを今後取り組んでいく予定だ。考察全部に取り組むということではなく、2年目は自発的、主体的がキーワードで、生徒指導提要を踏まえて指導から支援へという視点で取り組んでいく。</li> <li>・地区教頭会の取り組みではないが、メタバースは不登校で顔を映して話すことが苦手な生徒に有効であった。時間を決めて毎日数名の生徒とつながっている。ほんのちょっとしたつまずきがわかって、それを解決したら登校できた。</li> <li>・アンケートの質問の言葉が前向きな言葉だった。どんなことが大切か、うまくいった事例を問うアンケートだった。しかし、課題を考えるときには「困っていることは何ですか？」などと尋ねたほうがよかったのではないだろうか。</li> <li>・「自主的、主体的に」という主題だが、どれくらい自主性があるのかという疑問があった。</li> <li>・主体的、自発的とはどういうことか。中学校で考える主体的、自発的と、小学校で考える主体的と自主性の違いを考えなければならない。</li> </ul>

指導助言者	佐賀県教育センター 課長 森 義孝
助言内容	<p>○コミュニティスクールの在り方については、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて学校が家庭や地域と連携協働を行っていくことが大切である。そのためには4つ共有が必要で、①情報の共有、②課題・目標・ビジョンの共有、③アクションの共有、④成功体験の共有である。</p> <p>○子どもにとっての魅力とは何か。地域にある本物に出会うことであこがれを抱き、物事の本質に気づき、子どもたちの主体的な学びに繋がるきっかけになる。</p> <p>○奉仕的体験活動は、地域に愛着や誇りを持ち、地域を支えていく人材を育成することを目標に、また地域の課題を解決することを目標に取り組むことができる。</p> <p>○学校と地域と一緒に、子どもたちのために何ができるか検討していくための視点には、3つある。①熟議 ②協働 ③組織としてのマネジメント である。</p> <p>○副校長・教頭として学校の窓口となり、コーディネートしていく役割になる。</p> <p>○子どもたちの多様化が進み、様々な困難や課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育には、子供の発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を伸ばしていく教育が求められる。</p> <p>○生徒指導提要の改定の方向性は「させる」生徒指導から「支える」生徒指導へ</p> <p>○チーム学校としての基盤づくりは、管理職のリーダーシップと同僚性を土台とする。</p> <p>○学習支援では、人材育成を生かした役割分担を行い、全職員で共通理解を図りながら進めることで生徒の主体的な学びにつながる。</p> <p>○不登校生徒の対応では、チームとして対応できる教育相談体制が充実すると、生徒の社会的な自立を促すことにつながる。</p> <p>○支援チームの構築。教職員の横の連携として一人で抱え込ませない。どんなことでも問題を全体に投げかけて解決していく。</p>